

訛り乗り越え 朗読家に

響きの心地よさが命



舞台に向けて練習を積む朗読家の飯島晶子さん（5月31日、文京区で）＝上甲鉄撮影

幼い日、おじいちゃんが聞かせてくれたお話の数々。朗読家、飯島晶子さん55にとつて、それがすべての発端。大切な財産。

昭和40年代の半ば、北関東の地で、高校生になった飯島さんは、アオウサギへの強い志望を抱くまじに。

実家は石屋。東京の銀座通りが大改修中。その真新しい歩道の敷石を納めたのは、実家の仕事だったと。

家族が東京に行つては、その新鮮な匂いを、田舎へ運んでくる。東京と実家が太いパイプで結ばれているみたい。東京への憧れが膨らんでいく。

高校では、土地の訛りを直すことに取り組み、アクセント辞典をいつも持ち歩いて、自分でひたひたと直してい

った。それでも、後に進学した日大芸術学部の授業で「関東のあの辺りの子は、アオウサギになるのは無理」と、講師から断定されたことも、飯島さんは、自助努力でナレーションの仕事を経て、ほんとうにやりたい朗読にたどりついた。人前で読みつけて30年以上。

「朗読は、音の響きの心地よさが命です。聴くのはまずは自分。自分が楽しみたいくなり、音に出して読みたいと思うと、つい声が出てしまいます。気に入った文章ひとつに出会えば、全体を読み通しなくなるし、実際そうしています」

朗読家にとって、いちばん楽しい瞬間は、いつか。「舞

台に乗って読み切り、人々に何かが伝わったなと感じたとき」好きな作品は何か。いつも読みたくなるような、「それは、もちろん『藤十郎の恋』です」

枝川公一の 東京 ストーリー

これは、江戸時代の関西歌舞伎の大御所、坂田藤十郎の生き様を三幕もの芝居に凝縮した、菊池寛の傑作戯曲。

当時絶大な人気

を誇る藤十郎が、当たり狂言の一種向として、人妻に恋を仕掛ける。じつは愛しい恋の偽装。文字通りのお芝居、芸の肥やしのため。初め真の情と信じた人妻もやがて、藤十郎に遊ばれたと気づき、短刀で自害し、果てる。

この一件で、藤十郎人気が影が差すのではと心配する周囲。これを尻目に藤十郎「あなたの心配なことがあるものか。藤十郎の芸の人氣が女子一人の命などで傷つけられてよいものか」と。

飯島さん「この台詞を絶賛。『そこまでやるのか歌舞伎役者』という感じです。目で見るのとはちがう。しゃべること、快感が、許せない男ですけど」

さすが朗読家。

*

△飯島さんの愛▽ ヒロシマで被爆しながら生き延びたピアノを中心とするコンサートツアー「未来への伝言」に参加。今夏、東日本各地、9月ニューヨークと巡る。朗読担当。

(フンフィクション作家)